

土屋正義編輯

繪本石山軍記

十

遠  
2269  
10



遠14  
2269  
10

繪本石山軍記初篇卷之十

目録

朝倉景鏡壅井赤坂と乱妨を

并竹中の智略堀の長臣と屬し

信長虎御前山小着陣を

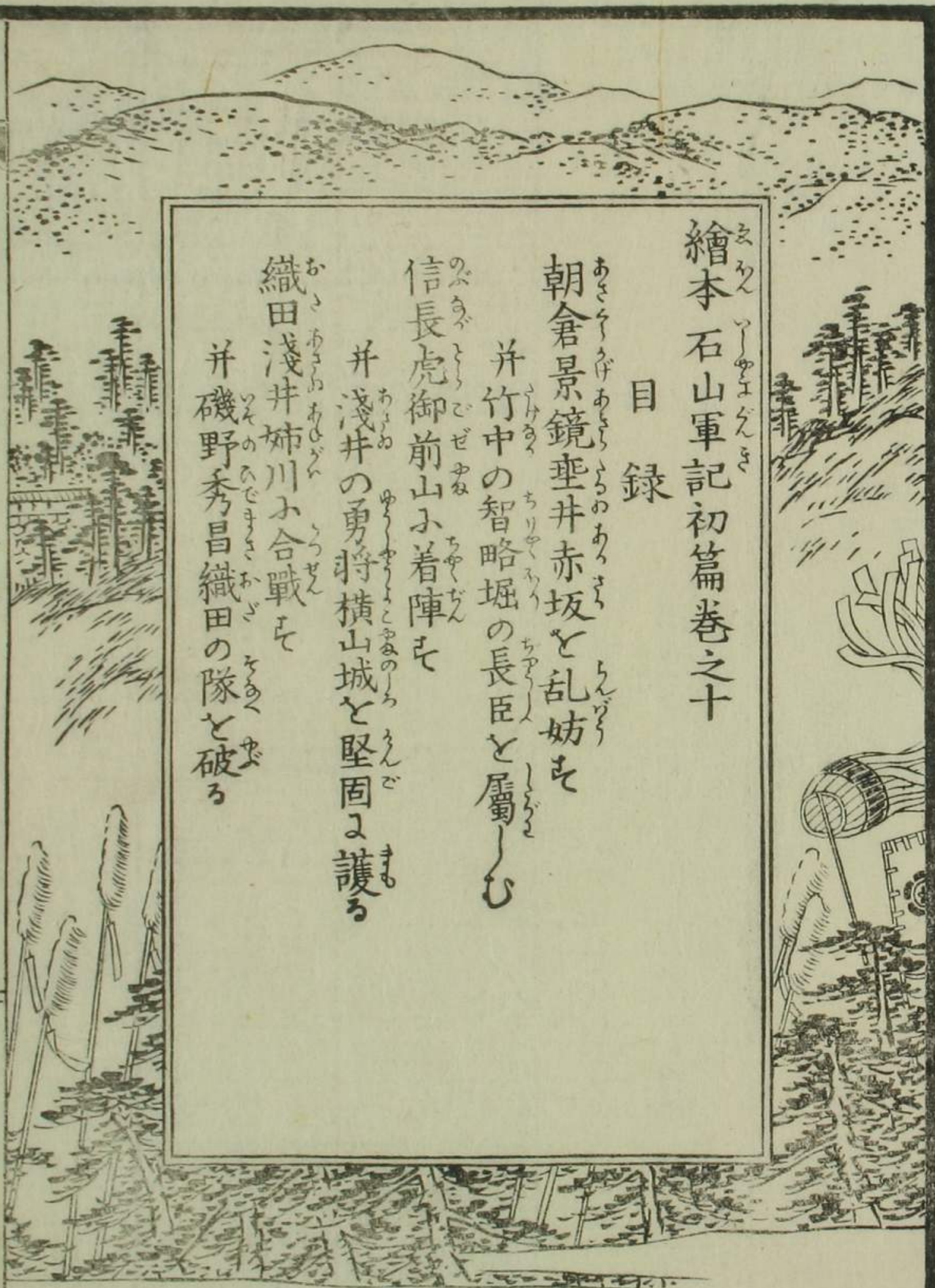
并淺井の勇將横山城と堅固に護る

織田淺井姉川小合戦を

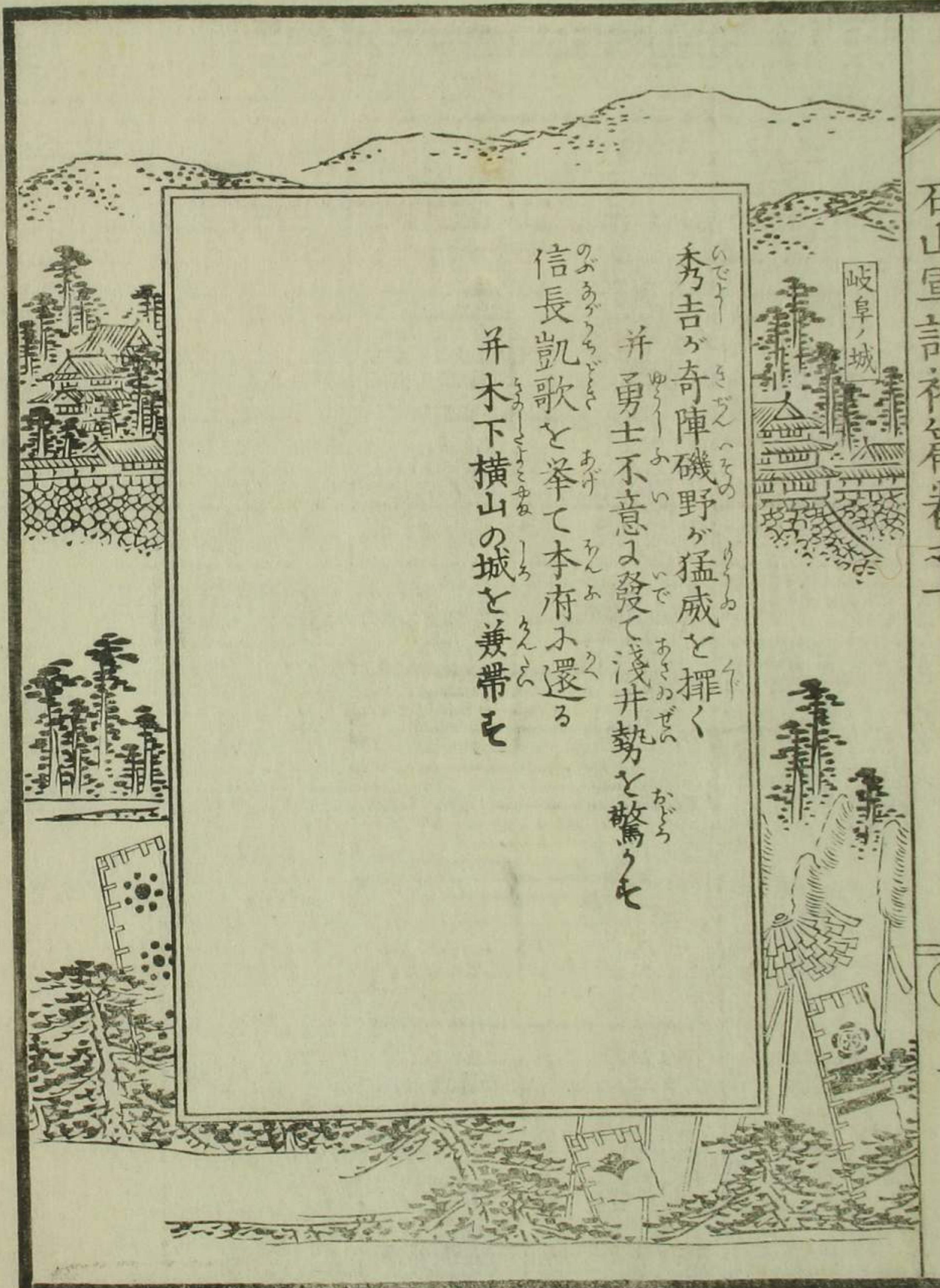
并磯野秀昌織田の隊を破る

石山軍記初篇卷之十

目一



岐阜ノ城



秀吉が奇陣磯野が猛威と揮く

并勇士不意に發て淺井勢を驚く

信長凱歌を奉て本府へ還る

并木下横山の城を兼帯を

繪本石山軍記初篇卷之十

土屋正義 編輯



朝倉景鏡壺井赤坂と乱妨を並竹中の智略堀の長臣と屬し

元龜元年六月三日の夜柴田権六郎勝家寄手の陣小夜討し將

率共必死と決り勇戦小敵兵以の外小敗し長光寺の城邊

敵一人もあくなり柴田城中小兵士と集め思ふまじに城と

修理し軍兵の忠功と賞し此上如何なり大軍あり寄るも恐

ろくに足ど此事を注進せしめて軍の次第ありし討取

大將分の首と悉く岐阜へ送り實檢ふ入々ふ信長大に感賞

し給ひ柴田が勇烈今ふ始めぬ事あり今度の始末別し比類

信長柴田  
感狀賜ふ  
圖



皇都 四方春翠連

不破彦三

感狀文云

今度於長光寺城依々  
木先敗北輩以大軍攻  
圍虎雖為小勢能盡防  
禦之術數日之籠城就  
中破水桶屬士卒切崩  
大敵被守堅固奈似韓  
大元帥背水智勇之程  
絕感賞為賞翫補往修  
理少進候也猶不破彦  
三河申候也

元龜元年六月七日

信長判

柴田修理少進殿



勝家

あり。拔群の勲功ありとて自筆の感状と賜り刺へ修理少進と改  
 めらる。柴田が使者ふ不破彦三と添て長光寺の城へかゝる。柴田  
 柴田の由と関て城門の外まどぐ出迎へ不破と本丸へ請入る。不  
 不破則ち信長の仰と傳へ感状と渡りける。勝家頂戴して君恩の  
 有難と喜び是全く面々心と一致ふりける。證あるは皆一同  
 小頂戴せよやとて兵士小残らぞ拜見あり。尤木下が鯨  
 江と落せし故小斯手むやく埒明しと柴田の夢も知ざりしと  
 なり。時小浅井備前守長政の佐々木兼禎入道と心と合し。越  
 前へ急使と以て早々義景も出馬あぶし。佐々木と牒合せ。  
 京都へ攻上るしと申遣し。朝倉の一族式部大輔景鏡

と大將として魚住備前守山崎長門守福岡石見守青蓮華右  
 京亮溝口河内守とくめ。歴々の勇士と相添三千余人と浅井  
 の加勢として差越るる。長政は小力を得て既小打立んと  
 あり。内小佐々木兼禎柴田が爲小切崩さ。長光寺の寄手  
 敗北して石部の城小引籠り刺へ鯨江の城まどぐ木下小乗とれ。  
 織田方まどぐ勢猛くなり。程小長政の用意齟齬せめ上る。防戦を  
 術と失ひ且信長遠く定め。當国へ出馬とせ。防戦を  
 備あて有る。所々の城々へ兵と引分て楯籠らしむ。  
 先美濃の国境長久山并安ホの両城より越前勢と籠あ。今  
 洲口長亭軒の城より堀次郎と守らせ。堀が後見として樋口三郎

兵衛兼益多羅尾右近と相添本郷の城より黒田長兵衛尉横山の  
 城へ大切の所ありて大野本土佐守三田村丸衛門尉野村肥後守  
 同兵庫頭ホと始め江北第一と呼び兵士を撰て守護せしめ長政  
 の居城小谷と四方より相救ひ又四方へ打て出後巻とて由と契  
 約し頗る用心厳しく備へ敵の寄ると待掛り朝倉景鏡へ長久  
 苾安の両城小籠とんと手勢を引具し小谷と出立しるが魚住備  
 前守と近づけ先達て信長敦賀へ乱入し金ヶ崎まぐ心の俣小働  
 時何の手柄もなかりし事残念あり今幸ひ小美濃坂小打  
 出て此儘小有んも言甲斐なり率や是より濃州へ打入少々乱妨  
 して手軽く引上ん如何と談ふ魚住も尤然とて同意し

多し三千餘人濃州へ打入六月十四日無井赤坂辺と焼拂ひ大り  
 乱妨あり程小織田家の諸士等そとや浅井朝倉の勢押し寄せ  
 緩々と働らせ引取とんと討べし用意とありて待々山  
 崎長門守魚住備前守等へ軍小馴る老士ありて深入り敗軍の基  
 ありとて翌十五日長久山小引籠りて小織田方案小相違して怒り  
 とりて詮方なり信長かくと関召し介有る江州表へ出馬して去の  
 怨と晴とへしと同十七日信長進發の由觸らるる此時長濱の  
 木下藤吉郎の浅井が構し要害の中にも長久山の味方の爲難義  
 の地あり信長の出馬以前小先とて落し置ざれば通路幾と  
 むろく尤軍兵と發し是と攻め地理嶮岨ありて勿々多勢と進

めがじし如何いせんいかにと竹中半兵衛重治たけなかつはんべゑしげちると招き相談まねがわらひしる小重治こしげちる因よて彼兩城かのりやうじやうの朝倉勢あさくらせいのとみと加勢かせいのとめと出張しゅちやうせし事こと命いのちりと守まもると思おもふ者一人ひとりも有あるべぐと故ゆゑ小一回肝こいちげんと冷ひやませるべ自ら退去おのづからたいそつと是こゝの差置さしおきて長亭軒ちやうていけん鎌かまの刃やいばの城じやうある堀ほりと味方あじき小引入こひきりいれる朝倉勢あさくらせい嘸なく恐怖こふふとく存ぞんらる候まうら朝倉あさくらが勢せい本國ほんこくへ引歸ひきかへる於おて再回さいかい出でる事ことあるまま候まうら小諸城將こもろじやう堀ほりと申まをす遠江守とんげしうが嫡子ちやくしあり今年こゝね僅ひたひた八歳はちさいなり何なにの思慮しりょると堀次ほりじ郎らうが後見ごけんの堀口三郎兵衛ほりぐちさぶらうべゑと申まを者もの愚臣ぐしん懇意こんいの好このあり語かたらみて見み申まをべし堀味方ほりあじき小参こまゐる程ほどありと芥安かゐやす長久山ちやうきゆさんの我われのと候まうらと答こたへる小秀こしゆ吉大きちだ小悦こえつび急いそぎ堀口ほりぐちと語かたらみと有あると重しげ

治直ちぢちく小従者こじゆじや三三人さんさんを鎌かまの刃やいば小趣こしゆと堀口ほりぐち小對面こたいめんせん事ことと請こふ堀ほり口ぐちして實まじ小竹中こたけなかつと竹馬たけうまの友ともありと今いま敵味方てきあじきと立別たてわかせしとと私わたくしの對面たいめんと憚おそりと返答へんたうしと重治しげちる城門じやうもん近く打うつて堀ほり口ぐち小對面こたいめんと請こふ事こと私わたくしの儀ぎ小あと堀殿ほりどのの御為ごゐと存ぞんじと参まゐりつる事ことあり聊ちやうも御遠慮ごゑんりょ小及および去いると出城しゅじやう御難儀ごなんぎ小候まうら重治しげちると城内じやうじやうへ入いれと申まをると實まじ小所理こしりと門かどと開ひらくと重治しげちる唯一ひとり入城いれじやう中ちゆう小入いれる重治しげちる堀口ほりぐち小對面こたいめんして申まをると今いま堀殿ほりどのの幼稚ちゆうぢ小まとまと故足ゆゑあし下後見げごけんして御座ごまる堀ほりの家いへの繁昌はんぢやうの為ため又滅まためつ亡なしと祈いのりありと余あり有あると事ことあり堀ほりの家いへの繁昌はんぢやうと思おもひありと早くはや信長のぶなが小一味こいつい同心どうしんありと唯ただ今滅亡いまめつじやうせんとなると浅井あさい小合あひ合あひ有あると

俱不命と失ひ家と滅しぬるも誰りの天晴忠臣と譽る者あるべ  
るや且小堀の祖父能登守親父遠江守りつるも浅井累代の家  
人とつるも非ど一旦の時勢ふりて其麾下とある事の當時一同  
の風俗あり抑日本へ天照大神の御末百王一姓の神国としてまは  
せば誰り王民ふあふるべし然るも浅井も朝倉も王威と恐るべ  
將軍と敬まらるる自身の榮華不任せしむる國恩と思ふは是誠不  
國賊と申へし其不義は一味して討死し死の上の耻辱と受人事  
口惜も次第ありぞ哉是の後見する人の早く思慮とてまはるる  
や我足下と舊好あるべし此條と告んぬ能越つるあるまじき合點  
まはるるべし緩々考へて長居の互の爲ありと云捨て立返るとい

通口の由と具不聽て大息つど我誤るる足下の教示ありせば國  
賊一味の汚名の下不主從討死し永く家名も断絶せん速不其詞不  
從ひ王命と奉まじし暫時まらぬとて多羅尾右邊と呼出し竹中に  
言つる條と有の儘不語りし多羅尾も異儀あり同心し俱不竹中  
不打連より長濱不推泰し降参の由まをりし木下大不悦ひ織  
田殿の御前の秀吉より取り申へし本領安堵相違あるべし  
と堅く約束し早く降参のありと願ふとて方便と示談つ差返  
ささるるは是より通口多羅尾の鎌の刃不還りし浅井不叛と織田方  
に合体の色と表しし竹中が詞不違はれ亦安長久山不籠り  
越前勢大小驚き堀次郎敵とありて此要害保ちし他人の加



勢して強敵小色まき大死して何の詮りあるも早く此と引退き  
然るに魚住山崎先小進んで落去ぬ織田家くく長享軒  
の一城味方小属する而已ありと芥安長又山の両城まぐ退去せ  
事首途よりと悦び多し

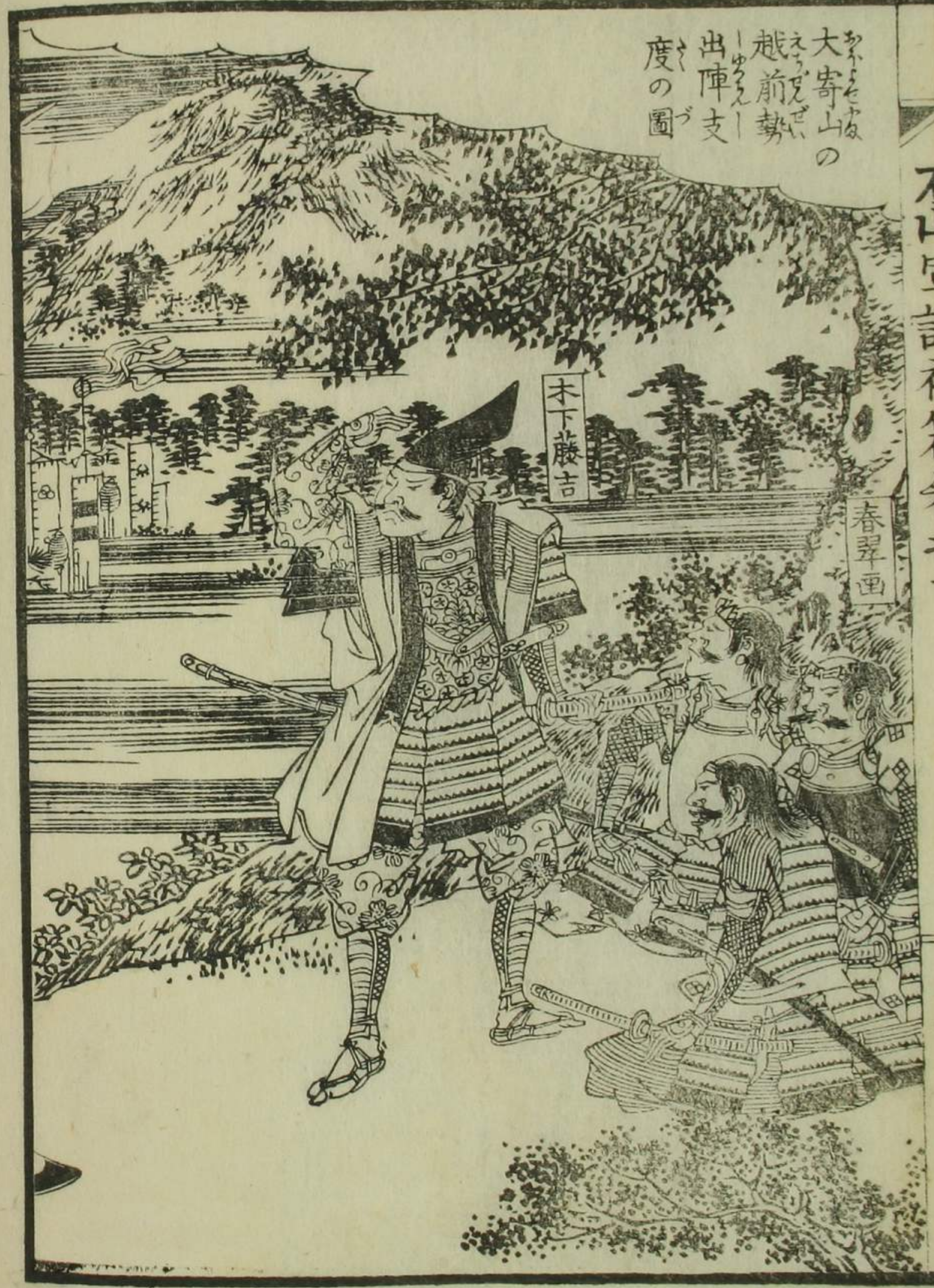
信長虎御前山小着陣を並浅井方の勇將横山城と堅固小護る

去程小三城も小埸明しより木下藤吉郎急ぎ其由と岐阜へ注  
進ませし近江發向の路次ひけ信長出馬の便りと上下三方  
余騎勇と進んで六月十七日岐阜の城と發しあひ翌十八日近江  
国坂田郡柳田西山小着陣し秀吉樋口多羅尾の兩人と召  
連御陣小参上し御目見と請奉り小速小召出さし神妙なり

と仰ありく木領相違あぶらぐら由御書と賜りたりれい兩人安堵  
して御先ふ立て御案内申へと言上を次小竹中半兵衛と召され  
樋口と説得し味方小爲つると拔群の勲功なりとて太刀鎧馬小  
賜りける斯く木下と召出さし長濱と持固め百姓とく静めつる  
と殊更神妙あり而己ありと鮪江の城と乗取佐々木兼禎と石部へ  
追込しと格別の忠節なり其上此度堀次郎と味方小つけ芥安  
長又山の両城まぐ退去せしめし事凡慮の及ぶ處ありと賞  
美ありとれ秀吉平伏し皆く君の高運小任せ且敵の天り  
背きし故あり候ふ秀吉が功小なりとと言上し信長もいよく  
真ゆり思召御氣色斜ありさき小谷へ働くべしとて



大寄山の  
越前勢  
出陣支  
度の圖



木下藤吉

春翠画

翌十九日手配りありぬ織田上野介信包丹羽五郎左衛門尉長  
 秀水野下野守信元等も三千餘人と屬して堀次郎と案内者として  
 横山の城の押へとも置坂井右近森三左衛門尉柴田修理進佐々  
 内藏助前田又左衛門尉市橋九郎左衛門尉佐藤六左衛門尉塚本  
 小大膳以下と引率して小谷の向ひたる虎御前山小本陣と居ぬ  
 長政願ふ所の幸ひなる速ふ馳向ふ一戦と遂んとくやると  
 父下野守久政と制して味方小勢なり信長の大軍なり頻て  
 越前の朝倉も出勢有べけれ両旗とく合戦とてと諫めたるは  
 長政も止事と得ぞ軍の圖とてとる信長あつと軍勢と  
 引分先雲雀山へ林三左衛門尉坂井右近齋藤新五郎塙九郎

左工門塚本小大膳佐藤六左工門不破河内守同彦三丸毛兵庫頭同三  
 郎兵工尉八千余人と向らせ尊勝寺表へ柴田修理進内藤勝助林新三  
 郎福富平左工門等五千余人と差向り。同廿一日此兵士等小谷の町へ乱入  
 在家と放火し狼藉とせども長政父子静まり返つ音もせぬ  
 信長虎御前山雲雀山小宿陣し。翌廿二日小谷を引拂ひ龍が鼻陣  
 替なり。横山と責べりと定めしき。此時浅井の老臣遠藤喜右工門  
 主人長政父子と諫めし小谷の人家と放火せしき返報し陣替の  
 退口と追討せんと申すども久政更これを用ひ唯朝倉の到着と  
 待し軍せんとて一向止むも長政も怒りと押へ同意と遠藤へ  
 返々も残念の至りありと先手の物頭町野若狭守不托し兵士五百

余騎多賀若宮の神人等と催し都合一千余騎あり織田の後殿に食付  
討しむ信長も思慮深き大将なきべ引拂ひの退口大事あれども  
佐々内藏助中条将監は桑田左工門の三人に後殿を命付らまし程に浅井  
方の追討に渡り合双方火水ありて戦ひたり尤町野に一千余騎も志と  
一致ふしこまに潮の湧が如く揉立ちたるより織田方も漸に敗ましく中陣の  
柴田勝家取返すこと加勢し終に此場を引たりたるが浅井方討  
取し首數三百余級あり味方二百余人討まき而已なれば先織田方  
に返報せし町野とて速藤も少く色を揚みたる儲信長も介し  
後龍が鼻に本陣と居られ翌に三日惣軍と以て横山の城を責らるる  
三万余人入替く攻りども當城に浅井家股肱の幕下三田村左工門尉

大野木土佐守野村肥後守と大将と歴々の勇士多く楯籠り其上  
矢玉薬以下乏しくかゝる寄手の大軍と此も恐まじく三将おのり持口と  
固め防禦し透間あるを以て織田方の軍勢も劣るるあり有様ども  
急に乘取ると得ど信長原来強氣あり此城一時に攻抜んと昼夜  
三日の間息とも續せぬ責りしが共要害よく勇士各必死となりて  
防ぎしに容易落城とてく様も見へざりたる介に有ども城中も防戦  
み勞まき苦む事尋常あるに長らく籠城覚束なく小谷へ後詰の  
加勢ありし若延引み及び開城より外に術ありと注進せしに浅井父  
子も尤と兼引くまきとも折節無勢ありしと思ふに任せざりたるに  
越前勢近々出陣とてくまき其勢を以て後詰とてさへべりと

越前へ數回飛脚と走らせし共兎角緩々々々延引み及む  
 まし處に淺井の早馬まよもや来る事重波のよんら如く織  
 田家の軍勢三万余騎みく横山の城と取圍んで攻る事急なり。  
 御加勢遅刻みけり落城遠く候ふ横山落城こそ河の時  
 直ち其競み小谷へ向ふ。唇る破る齒さむ。依て度々御出馬  
 と申請ととも今御旗と出さざれば候ふ。豫くの盟約の  
 趣意に北背くら事大丈夫の行ひみあはれ其頼み無さる實に  
 本意と失くさるる。彌御出陣延引み及ぶくハ力なり。長  
 政父子一手とりつ。信長と唯雄存亡と決し申へ。若し命  
 尽く戰場に討死あはれ其恨と泉下めて報とと。言

ひ遣し今頼み甲斐ありと先取りせし誓紙と返しけれ。  
 義景初て油断せしと後悔し先手分の爲とて一族有り朝  
 倉孫三郎景健と大將とて一万余騎と差あり。漸に六日  
 の晩刻小谷の彼なる大寄山の上下み透間あり。迫陣取ら織  
 田方へ是と見つけ朝倉の加勢とて出張せしを彼勢の手  
 配りせぬ内横山と責落し越前勢小鼻あり。短兵急な責  
 つきども城兵少くも弱る色なく。弥猛く防戦し。小谷へ注進櫛の  
 齒と引り。長政今の義景と待よ及ぶ手勢許し。向  
 して加勢小来り。朝倉孫三郎景健と相談し。信長の本陣へ不意  
 切り急し責敗らんと。下野守久政の三千餘人にて本城小谷

小留守と頼と翌廿八日の晨朝小押寄へーと面々用意となり。  
偏小心と勵し々々

織田淺井姉川小合戦を並磯野秀昌織田の隊と破る

于時六月廿七日の夜亥の刻分木下藤吉郎秀吉大將の本陣小  
参上し々々小信長の終日の指揮小疲を暫時帷幕の中小入休息  
して御座るが秀吉泰上と聞しゆ何事あると驚きたまひ  
急ぎ御對面ありと深更小伺度せし条心元ありと有る小丸  
候ふ越前勢到着仕り候と今宵相伺ひ候ふ處先刻より大火  
と焚ひい全く兵糧の支度と見へ候ふとそれ明朝淺井朝倉大  
寄山の陣と拂ひ此方小打りらんと企るるへ早く御勢と出ん

半途小於て合戦と挑まきいり敵の見積り相違して定やく廢亡  
仕るべし唯今より直さぬ打立せめあつ然るべく存じ奉ると言上  
るる小より信長大小悦び甘めい敵の來ると半途小迎へ戦ふと必  
勝利の機小當まりさるる手分とあをべしと諸士大將と悉く召集  
め夫々備へと定めしるる儲信長今日自ら淺井小對ぶりと一  
坂井右近將監政尚二千人二番池田勝三郎信輝二千人三番蜂屋  
兵庫頭頼隆二千人四番佐久間右衛門尉信盛二千人五番森三左衛門  
尉可成二千人其外信長の旗本前後左右七段小備へらと第一の備  
木下藤吉郎三千人次小丸の安藤伊賀守右の氏家常陸入道ト全真  
中小信長旗本次の左の明智十兵衛尉光秀右の前田又丸衛尉利家

後陣ハ菅谷九右衛門尉川尻與兵衛尉福富平左衛門尉  
等なり横山の城の押へし織田上野介信包丹羽五郎九衛門長秀  
不破九毛等とさし置と曉近くある儘ふ坂井右近が手より段々小  
押出し西と望で馳りたり。浅井方より斯く知れ横雲白と明  
ゆるる。浅井備前守長政八千餘人朝倉孫三郎景健越前勢一  
萬餘人と召具し大寄山の陣と拂ひ野村三田村と志して押出  
と。浅井の先鋒より佐和山の城主磯野丹波守秀昌小高宮三  
河守大野木大和守赤田信濃守蓮臺寺等と相添て一千五百  
余騎その次小朝倉勢五千餘人後陣ハ備前守長政の旗本三千  
餘騎あり進ませり。織田方も是と見て前後左右ふ備へと乱

る。両軍進んで押寄つ姉川と隔て陣と張り勝負と一挙小決せ  
んと既小合戦ふ及びる。浅井が先陣磯野丹波守ハ大勇猛の剛將  
なり然も軍小馴ら古兵あるべ其手小随ふ者一個とて柔弱あり  
あり似ると友と勝せし兵士一千余人其余り高宮三河守大野  
木大和守山崎源太左衛門等。つとも武勇の名と得し徒ら小  
加る其勢都合五千餘騎と馳りたり。磯野ハ織田方の備と  
見て味方小對ひ此敵と破るる唯一條小突破るふあり。我真先  
小進んで突崩をべし。足下小左右と顧む我小従つて正面と切  
破り信長の旗本まぐ押詰べしと下知し。秀昌もさうさ鎗と  
取て真先小進み鐵炮の兵士と左右小備へ詞とけあふ放つべしと



佐久間信盛

春翠画

江北姉川  
合戦の圖



磯野丹波守



約束し騎馬の兵士と先小列ねて織田方の先陣坂井右近將監が  
 手小馳向ふ坂井が兵士鎗と取て突くまば礮野が方にも鎗と合  
 せく突合ふ時礮野下知して鐵炮と打うけしむる坂井が兵士  
 等驚き周章左右へぶつと散乱を秀昌をくや軍の今ぞと持と  
 る鎗と取直し面もあつど突掛まば坂井右近は口惜と兵士を  
 勵まし踏止まると戦ふと思へども敵の大勢みて目み餘り味方  
 の小勢みて且鐵炮ふ打くゆらま備乱まると色めると右近  
 が手あつ坂井喜八郎可児彦右衛門以下百余人討まると敗走  
 するまば織田方の二番備池田勝三郎信輝二千余人と押かす  
 坂井ふらると戦ふと礮野の初の軍ふ切勝て勢いあつ破竹

の如く猛威と震ひ池田が勢の真中へ切入り突らまば池田が勢弱  
 きまるとあつ一陣破まると後あつ死物狂ひま當りま隊  
 伍乱まると見へると礮野益々力を得る軍卒と勵せば池田が兵士右往  
 左往ふ散乱を三番備への蜂屋兵庫頭頼隆二千余人関と作つと池  
 田ふ替つと戦ふ礮野の二陣二陣と切崩し勢ふ乗ら織田の旗本ふ切  
 入り死や者共と下知し息も續せむ向ふと蜂屋荒手なれども  
 坂井池田の先敗ふ怖らると一鎗も合ふと只一搦ふ追散らる四番備へ  
 佐久間信盛蜂屋ふ替る備へと立んと礮野の猶も嚴し攻付ま  
 ば佐久間が備へも乱まると左右へ開ひと戦ふと五番備への森三左門  
 二千余人と真丸ふ備へと馳向へ礮野の士卒ふ下知して云く敵の備

と四段まゝ敗りし。此備へは切崩さば信長の旗本なり日頃の遺恨と暗き。此時あり各我ははるる後とあ。大音お呼らり大太刀と振らば。森が備へは切らる。磯野も續く人々の高宮大野木山寄の勇士面もろく。号き叫んで打てり。此勢は森が備も既破らる。見し。信長是と見ゆひ。旗本出る可成と援よと下知ある。木下秀吉兼り夫よ及候ま。秀吉是不扣へ。御心安るべと申し。木下手勢も計畧と言含め態と備と技疎あり。森へ使と立。合戦今に程よく候。御休息あり。と言送れば可成も実もと思ひ操引も人数と纏め左右へ開く。磯野は信長の本陣へ切入んと思へ。森が勢も目もろく。進み行き。木下が隊伍揃はぬ

備と見。秀昌大に嘲笑ひ直し駈破んと思ひ。合点行ざる軍立ち。信長の本陣の先手何程小勢もて。介も備四度路あり。如何ある奇策や為らん。殊も此手の織田家の剛弼猿冠者が備あり。麓忽し討入。猿智恵小墮し。暫く猶豫をたらし。秀吉が奇陣磯野が猛威を揮く。并勇士不意に發て。淺井勢を驚かす。木下秀吉の磯野が左右なく掛らぬ。我備立と怪し。疑と起ると見へ。然るに此方より討入り。一操も破るべし。と急下知成。秀吉真先も駈出。丹波守いよ。疑ひ危る。今更引べき軍あり。と。戦ふ。い。實も軍の大將の心もよる。磯野心中も疑惑と生じ。今までの勇氣暴も緩む。僅あり。木下が勢も攻立ち。色めきたつ。木下時分の

ようと下知をば左右より鳥銃と打ちけさせ蜂須賀小六稻田大炊中村  
 孫平二右より水下小市郎加藤虎之助福島市松片桐助作堀尾茂助等二  
 千余人浅井が八千余人の中へ面もろく切入り礮野が勢ハ鳥銃打  
 ちつゝまのまき三百余人一時倒れたり加藤福島蜂須賀鎗先を揃へ突  
 立まば浅井勢一支もあらば四度路ふらつゝ引退く礮野これを見  
 言甲斐あき味方の振まひうそ我ふ續々や令と木下が備へ打りる秀  
 吉得たりと下知とふ。鉄炮打ちけ三方より礮野を取囲む討くまばじ  
 も猛き秀昌も會釈らゆつ且今朝より數度の戦ひ鋭氣疲まされ  
 ば無念なう後陣に譲り引退く浅井長政の後陣の新手赤尾  
 美作守ふ二千五百余人從へ旗本の勢一千五百余人都合三千余人討く

ろろと木下ハ暫し支る態と勢と左右へ分ち中へ開ひく通しつゝ  
 浅井勢ハ大勇進めく味方と励ま。駈つて信長遙みこき  
 と御覽あり。木下が勢既ふ敗まり早く援ふと仰ふ氏家ト全安  
 藤伊賀守の兩人横合より切つゝまき池田佐久間坂井も取返  
 前後と乱し戦ふ。遠藤喜右門浅井半助兩人ハ今日の軍不  
 負ふを生く再回くらと心お誓ひしとあまき。撃とも切とも事と  
 もせだ命限り戦ふ。此時秀吉の旗本の勇士礮野が兵士と戦へと  
 死者狂ひの浅野が太刀先りろ木下も崩ま立敗走せんとあは  
 処ふ奇異ある哉礮野が隊裏らまき。右往左往ふ散乱と時ふ  
 六尺有余の大兵黒き木綿糸あ威したる具足と着。鉄

形打らる宛と居首ふ着ふ。大手と廣げ群る勢と片端より取て  
 へ投引秘んぐの打居へ荒廻きバ磯野が勇軍騷ぎく乱れたる木  
 下秀吉大さふ勇之味方と扶る勇士と討とふと下知するみぞ加藤  
 虎之助直先小馬と駈出し群る敵と從横無尽み切立きバ磯野  
 が從兵散る成る敗走と秀吉大音小味方と助くる勇士の名を  
 尋ねよとの下知の下より軍使馬と駈くる。彼の士小對ひ味方と助くる  
 戰將の誰人なるぞ姓名と告られよと呼りたり。彼士淺井が兵士嶋  
 田權左工門と太刀打と戰あぐる。答るるの拙者ハ加藤虎之助  
 郎等。木村又藏ありといひも終らば島田と討軍使此戰を見果に  
 して引返し秀吉小斯と報む加藤虎之助大悦び馬と駈出し

是と見きバ實小先達と井上と喧嘩小及び討果さんとせし  
 木村あれバ大歡び能も約束と變ぜん来りし者ら殊小只今  
 の働き抜群ありと賞美しらま奉公とめりの土産小候ふと  
 二級の首とさし出と清正と秀吉の前小伴小又藏兜と脱ぐ  
 謹んで申るるハ先小加藤どの厚恩ありり老母の病氣心と残さ  
 ば介抱仕りけとさる。以前二日終小空ユくなり候ふ七日の佛更  
 執行ひく後参るべくと存トれ処をまがもなく今日の軍と  
 兼り取りのも取取くど馳参る道とぐる敵の首二三級奉公始  
 の手土産小ゆとて差出しらま秀吉大感ト天晴の働き神  
 妙ありと褒美ありらふより木村又藏面目と施し井上と再會

の喜びとの俱とも加藤の手て不属しひたり借浅井長政の信長の本陣の切入きりいんとせし処ところ木下の勢せいの後のちより攻せめめりし程ほど大おほく驚おどろき是これを援たすひ戦いくさふらち磯野いそのと打うちまきしと見みへく敵方てきかたの勝鬨しょうごうの声こゑ夥おほく聞きえしと浅井あさひの兵士へいし勇氣ゆうきたゆみ戦いくさひ疲つかれ終つひに敗まけて總そう崩くづれしとありて引退ひきひきしなり

信長凱歌うたと擧あげ本府ほんぶを還かへる井木下横山いぎげの城しろと兼帯かねたひ浅井あさひが本陣ほんじん散々さんざんに敗まれ勇士ゆうし多く討うちれしと織田おだ殿どのの本陣ほんじんありしと首実くびじつ檢けんしし其名字そのなづなと糾とれしと外とに浅井あさひの老臣らうしん遠藤えんどう喜右きゑ門かど尉ゑい春基はるきは信長のぶながに近ちかづく只ただ一撃いちげきを討うちんとし味方あじかたの士し三田村さんだむら莊むら右門みぎかどが討死うちいたる其首そのくびと採とり提ひさげ我が面体おもてと血ちとめりしと塗ぬり既すでに信のぶ

長床ながしど机ぎふかり居ゐる傍かたわらへ近ちかづく進すすむと竹中たけなか半兵衛はんべゑの舎弟しやてい久作きうさく重友じゆうゆうと見み咎とがめ何者なにものあれば大将だいじやうの御座ござ近ちかづく無礼むれいあり其首そのくび此方このかたへと取とりし否いな此首このくびは子細こさいの候まはふ直ただ々ただに御覽ごらんふ入いれんと押退おしひきて行いくと久作きうさく重友じゆうゆうを曲まげしと無手むてと組くむ組くまて遠藤えんどう首取くびとり直ただし。信長のぶながと目當めあたふとと投付なげつけたり久作きうさく終つひに組勝くみかちて首くびと搔かきて実檢じつけんふ入いれ信長のぶなが大おほく感かんぜしと且かつに此者このもの何奴なにやつも我われと討うちんと計はかり申まん。定さだめて名なある者ものありしと生捕いけちる安養寺あんやうじ三良さんら左衛門ざゑもんと召出よびだされ是こゝと見みしりる遠藤えんどう春基はるきある由よし申まし信長のぶながは名なありしと遠藤えんどうありしと年とし経へて我われも見忘みわすれしと久作きうさくは首取くびとりたりと大おほく賞しょう美みありしと安養寺あんやうじ三良さんら左衛門ざゑもん尉ゑいの先年せんねん信長のぶながの妹いへ姫ひめお市の



あごのぶさか  
織田信長  
ぎふ  
岐阜  
かちん  
凱陣の圖



方淺井家へ御縁組ありし御家臣不破河内守と好ま有と以て申入  
 らせし一處安養寺深切小色々執成せし事ども有しと思ふ  
 助けく小谷へ飯ささるる諸是より小谷へ攻寄戦ふし。木下藤吉  
 郎さぬぐ諫め奉りし事も信長更不用ひ給ふ一先凱陣あるべき  
 小決しより秀吉獨本意ありし事小思ひ横山の城ありとも攻落さ  
 んと進め申ふ。是と許さるる程小木下大小悦び三千余騎を  
 攻め合戦をく挑みて大野木土佐守討死し三田村左衛門野村  
 肥後守の城を開き降参し。小谷とて歸りて秀吉城と請取  
 て手勢を以て堅固小守り此由本陣へ注進を信長聞し召悦喜斜か  
 らむ速小一城と得しと御感洩りし由仰出さし其夜の姉川の

東小本陣と居りし翌九日いみじく陣どりの有へりとも横山にては  
 味方の城となりしは是と守る者あり有へり誰とてか擇む小  
 此地の小谷より近く越前街道とて尋常の徒の能守るる處あり  
 後木下より外小有へりと思食且木下り籌策をとり城あり  
 とて秀吉小城代と仰付られし秀吉謹んで申さる身不肖小候へ  
 とも長濱小在城仕りしは是と異て守り候しと難くもいらし其上  
 調略仕りしは浅井父子小困窮させ後日の御合戦よりしき様は  
 候とて御請申せし信長大小悦びありし諸佐和山の磯野の如  
 何とてと評定ありし小木下申さる磯野の江北第一の武士なり是と  
 攻るも横山のてく容易に落去仕るまじ只此まに爲かりし佐和山

近辺不要害と構へ御人數少々残し置ま候之に一丸の礮野自然  
と勢屈し終る降参仕多しと勺配ありし信長もあま不同  
あひ則ち佐和山の向ひに百々屋敷とりる所不要害とて丹羽五  
郎左衛門長秀と残り置ま礮野を降参させし仰合めし信長  
あひ本国岐阜に凱陣しあひくる木下藤吉郎へ千五百余人し横山  
の城を守り長濱あひ竹中半兵衛重治と城代とて浅野弥兵衛と  
共におちま守らしむ

却説越前の加勢朝倉孫三郎景健の三田村表に出張し織田方と姉  
川小於て合戦し及び姉川と越つ越まろ両軍互ひに名を惜み義を  
重んじ勇と震あつて戦ひしが朝倉方終に敗軍し及び討死手負數

志まに就中朝倉方うと柱石と頼みし真柄十良左衛門尉父子を  
始め黒坂備中守前波新八郎同新太郎小林瑞周軒魚任次郎左  
衛門等麻生多多く討死し大將景健這々の体あつて越前より引  
返せり此合戦の始末の故あつて詳し小著は略し畢ぬ  
浅井備前守長政の姉川を敗軍し多くの味方を討ま且頼より  
思ひ朝倉の越前小引返し剣へ横山の城とて落さし小谷の城出  
區々の風説ありと穩あつて責めて横山と取返し味方の銳氣を助  
くると横山と責るといども元來城責ふ妙を得り木下あまは  
守る事も又尋常あつて程小谷勢の押し合はく戦へとも損  
するのめり城兵此しも弱き色あつて浅井も是非多く攻得



して等閑小捨あひざうとてさうふらふら。木下時々打て出小谷近邊きんぺんと放火はうか關妨くわんぼうして敵と驚おどろうし手輕てかろく引上ひきあるふら浅井方あさなる無念むねんの齒は咬くと鳥とりと之これも鳥方とりかたもたて怒いりを押おへ居ゐる

繪本石山軍記第二編十卷  
此編々今般發見せし續ふて織田本願寺十餘年間の戰事鈴木重幸の軍配奇計重幸討死して後石山開城信長光秀のたあふ紙殺せられ驚鳥の森の圍解散し鈴木孫六躑躅上具塚天満寺に御堂と移されし事并に准如教如兩上人東雷派より分る其後御堂建築の際木曾山中より巨材と出き時々隱士怪刀等真宗末世繁榮の事と不洩書著りたる書なり

繪本石山軍記初篇卷之十 大尾

軍書小説類藏板目錄 大坂心齋橋通 伊丹屋善兵衛  
南久寶寺町

源平成盛衰記 片假名 廿五冊 後太平記 片假名 廿五冊

殘太平記 同 十二冊 四國軍記 同 十二冊

駿臺雜話 平かな 五冊 續武將感狀記 同 十冊

楠正行戰功圖會 平かな 十二冊 聖德太子傳圖會 平かな 六冊

太田道灌雄飛錄 六冊 繪本西遊全傳 四十冊

繪本玉藻譚 五冊 同白狐傳 十冊

左侍門太田持資入乃多源三位親政卿の傳  
瀧上杉氏の家臣なり文武の英才を祖ふ  
馬の一世の戦功忠義を香く仰ぐなり



近江縣物語 五冊  
大悪逆を正史と出入せる面白く歴史あり

近江縣物語

五冊

花山院の所代ありて坂上梅丸が全傳ありて  
盜賊を系保補齋のボが残暴に橋安世が  
女因生が貞操安世が甥常く邪慾眩病の  
梅丸が復讐先給及子留てて賊徒征伐  
の大將軍なる保昌を助けて賊を平らげ終  
近江掃平進み生の父母逢い住居してその  
父の妙ありて聞て知るべし

昔語松虫墳

六冊

建武の頃河内於世の勇士野田水郎清宗が  
女勇妹桂子と結ばぬが奸隣安井半次郎  
悪言田勝美義里より世田の家を水郎清宗が妻  
松せが狂死水郎清宗が妹の遺女楠木が孝心  
松虫墳経塚などの由来をあるす

今昔二牧繪州紙

六冊

天文の頃二牧繪州三木の城主別所長宗の御  
蔵崎共おとす女子ありて安井半次郎が松  
遠原勇義が松三郎左衛門が奸悪して高  
村の俳優が義直をとりて流す話とあり

忠孝貞婦傳

六冊

大庭伴鐵信澄八波田坂右衛門が女計り中ら  
て自害し妻の里人と赤隼野田對助が貞烈  
忠勇なて冤を雪だてて幕あり

復讐言十丈松

七冊

近江の土井逸海浪人藤村大虎が敗後  
れを尋一人三年冤家と見い青柳佐市  
らと友とくも阿波の藤村とて志とて遠く山

忠孝人龍傳

五冊

忠孝人龍傳

奥州小田原の長は藤崎三郎右衛門のふもの

北野 二葉此梅 六冊  
誠茶の女賊池上七九郎が冤悪の事孝子  
菊女と上田三郎が復讐の小説にて悪  
年若見三之丞最候の老人を教師が事か  
を續りりのむ

十かえり花

六冊

建久年中中や出羽の山縣の御士常盤井内記春  
兼則二男三郎美人小仙御とあはれて教と文  
け後年諸事を助けて父の仇を山伏山討ちて  
仙女去来見と昇天せる奇談奇事といふべし

彌生佐久屋

六冊

彌生の良長恩池左近が女児弥生とて佐倉八  
郎の佐倉長庫が狂死を子三郎が胆勇教寺の  
以と除た文津田の里ある福富が女児白雲とて所  
遇松本軍を騙術秋山大膳、鱈及ハ毛雷  
童九が滅亡八流のり跡を久さる

花標因縁車

五冊

小幡半左衛門が小金と考を傳とて  
逢い頼梅の常念法師が及下由藤の因縁と  
怪くある

玉搔頭

五冊

三光の掃のりと王ししう話語りて上野の團  
高月土の兵眼を十左衛門が妻の良と再会  
と上方に出て面をか押だして二百餘兩の全  
と携帰と路指針は教り強盜を四郎と眼

前記の士人東條國書幼年一して父助を  
夫が仇山仲社二部を年久あへて伺ひ探り後  
子和州郡山より後世にせし事案を録し  
て活書に傳奇事紙に及あり

南部 小栗忠孝記 五冊

奥州南総の士竹内躬吾同藩に親善の士  
小栗毛平と結み此稿に人をして討殺せし  
小栗の僕を助終に其の遺稿をとり得し  
所波重小部之妻の告げを以て小栗  
百二部小栗の父の仇を報せし事案あり

長崎聞見録 五冊

理齋隨筆 六冊

和漢の雜事所載の載れられし事案  
益鮮しくして其の趣を私く述べし

これ一千九百年の事と云ふは其の大井宿  
の飯盛所からいふに計りて金  
銀の急難を免れし事奇蹟に面  
て

金屋金五郎全傳 五冊

浪花堀江の市人金五郎が風俗向て義侠  
を南波額の小に懐実の懐きむべしと被  
半時罷居居門の癖性の可なり後小栗將庵  
澄と異して報人との二統あり

輪廻物語 五冊

古傳仲麻呂古傳大伝ホの流傳より安在と  
舊事より明名海をさし多と悉く俗説の  
修を叙して張本と一海陽陸陽両水乃  
説を附合しして小説荒唐にして架空の結構  
則ち和漢の史外にも一奇話といふべし

風流茶人氣質 五冊

東西兩本願寺来由

繪本石山軍記

土屋正義編述 松川半山画

初編 十冊出版  
二編 十冊嗣刻

此書は本願寺遷移より第八代まで如上人自ら記述を著し  
里橋妙生玉の存内石山清堂と著し如上人より第十一代如上人の  
到り織田信長此地の要所と仰し本願寺を退け博野を以て築りんと  
如上人と十三年の戦争に於て本願寺の事あり如上人の事  
配属の大小平派の計を以て如上人の事あり如上人の事  
戦国老人老翁九字の名号の事あり如上人の事あり如上人の事  
の英智を著し如上人の事あり如上人の事あり如上人の事あり  
如上人の事あり如上人の事あり如上人の事あり如上人の事あり  
之を改る如上人の事あり如上人の事あり如上人の事あり如上人の事あり



